

福岡県発達障がい者修学支援
モデル事業
平成29年度事業報告

1. 平成29年度 事業の活動状況

- ① 企画推進会議委員の構成
- ② 企画推進会議の実施状況
- ③ 訪問した大学一覧（※医療系大学を除く学生1000名以上の18校）
- ④ 大学訪問の目的
- ⑤ 大学訪問の結果
- ⑥ 【参考】 障害者差別解消法に基づく大学での発達障がい者支援

① 企画推進会議委員の構成

分野		氏名	職業（役職）
学識者	委員長	山下 洋 (香月 大輔)	九州大学病院 子どものこころの診療部（准教授） 住所 福岡市東区馬出3-1-1 電話 092-641-1151（代表）
	委員	須貝 由美子	福岡県臨床心理士会（会員 臨床心理士） 住所 中央区赤坂1-2-7 みずほビル607号
就労	同	井福 浩二	ウイングル福岡中央センター（サービス管理責任者） 住所 福岡市中央区高砂1-2 4-2 0-7 電話 092-534-5780
	同	野田 文明	障害者就業・生活支援センターちくし 住所 春日市春日公園5丁目16番1-1
行政	同	渡邊 慎一	春日市 福祉支援部（福祉支援課長） 住所 春日市原町3-1-5 電話 092-584-1111（代表）
	同	石川 茂 (福田 益光)	大野城市 市民福祉部（福祉課長） 住所 大野城市曙町2-2-1 電話 092-580-1852
	同	宿 政充	福岡県 福祉労働部 障がい福祉課（参事補佐） 住所 福岡市博多区東公園7番7号 電話 092-643-3262（代表）
福祉	同	草本 武俊	障がい児等療育支援事業受託施設（社福） 宰府福祉会（理事長） 住所 太宰府市大字大佐野761-1 電話 092-918-1800
	同	公文 眞由美	福岡県発達障がい者支援センター あおぞら（センター長） 住所 八女郡広川町一條1361-2 電話 0942-52-3455
当事者団体	同	桑原 由美子	NPO法人発達障がい者就労支援ゆあしっぶ（理事長） 住所 春日市桜ヶ丘3-52-403 電話 092-573-0108
	同	伊野 憲治	福岡県自閉症協会（会長） 事務局住所不明 電話 092-565-5254
教育	同	今村 由起子	太宰府特別支援学校（進路指導担当教諭） 住所 太宰府市大字大佐野557番地1 電話 092-
	同	渋田 登美子	筑紫女学園 障がい学生支援室 住所 太宰府市石坂2丁目12-1 電話 092-925-9662
	同	高尾 朋子	筑紫女学園 大学院（人間科学研究科 人間科学専攻） 住所 太宰府市石坂2丁目12-1 電話 092-925-9662
	同	沖中 幸子	九州大学学生支援センター（進路・就職アドバイザー） 住所 福岡市西区元岡744 電話 092-802-2735
医療	同	三原 伊保子	一般社団法人 福岡県精神神経科診療所（会長） 事務局 福岡市南区野間1-16-22（いまとうクリニック内）TEL 092-561-9723
	同	山下 真弓	福岡県精神保健福祉センター（課長） 住所 春日市原町3丁目1-7 電話 092-582-7510
事業担当	法人理事長	西江 雅彦	医療法人西江こころのクリニック 院長
	マネージャー	竹之内 尚久	医療法人西江こころのクリニック 精神保健福祉士
	事業担当者	井上 慎司	医療法人西江こころのクリニック 臨床心理士
	事業担当者	那須 亜理沙	医療法人西江こころのクリニック 精神保健福祉士
		住所 春日市春日原北町4-11 メディカルシティ春日原 3階 電話 092-588-2444	

② 企画推進会議の実施状況

回数	実施日	内容
第1回	日時：平成29年12月13日(水) 14:00～16:00 場所：就労移行支援ココリエ内	事業の説明・活動報告
第2回	平成30年2月7日(水) 14:00～16:00 場所：就労移行支援ココリエ内	経過報告・プログラムについて
第3回	平成30年3月14日(水) 14:00～15:00 場所：就労移行支援ココリエ内	来年度に向けた展望・プログラムの実施状況について

③ 訪問した大学一覧（※医療系大学を除く学生1000名以上の18校以上）

大学名	学生数	大学側の部署
西南学院大学	8,175	学生課・キャリアセンター就職課・学生相談室
福岡教育大学	2,792	障害学習センター
九州共立大学	2,792	学生課
九州国際大学	1,745	学生課
九州女子大学	1,362	
福岡大学	19,611	学生課
西南女学院大学	1,618	学生相談室
九州工業大学	4,181	学生総合支援室
福岡工業大学	4,287	心理相談室・就職課
北九州市立大学	6,061	北方キャンパス事務局
福岡県立大学	1,028	学生課
近畿大福岡キャンパス	1,608	学生課・学生心理相談室
西日本工業大	1,453	学生課
九州大学（筑紫キャンパス）	（全学）11,844	筑紫キャンパスライフ・健康支援センター
筑紫女学院大学	2,487	学習支援センター
福岡女学院大学	2,106	学生心理相談室
九州産業大学	10,371	学生課
久留米大学	6,529	学生課
久留米工業大学	1,029	学生課

※学生数は平成27年5月1日現在

④ 大学訪問の目的

- ・ 事業についての周知
- ・ 各学校の既存の支援体制についての聞き取り
- ・ 各大学での発達障がいのある学生の状況についての聞き取り

⑤ 大学訪問の結果

- ・ 事業で行う支援について、具体的で効果的な、それぞれの大学で導入しやすいものにして欲しいとの要望があった。
- ・ 福岡県内の大学生を取り巻く課題(後述)について把握できた。

⑥ 【参考】 障害者差別解消法に基づく大学での発達障がい者支援

障害者差別解消法の施行により、大学内での合理的配慮を実施する目的で県内の6つの大学で障がい学生の支援を行う部署を置くなどの対応をしています。発達障がいのある大学生の支援も主にこのような合理的配慮の一環として行われています。

それ以外の大学では大学内の臨床心理士が就職担当の部署と協力して支援を進めているところが多く見られます。また、就職担当の部署にて単独で支援している大学もありました。

大学名	発達障がい学生（障がい学生）支援の内容
九州大学	コミュニケーションバリアフリー支援室を設置
九州工業大学	学生支援センターにソーシャルワーカーを配置
福岡教育大学	学生総合支援室を設置
北九州市立大学	学生相談室、学務第二課が窓口となって対応
福岡大学	相談窓口を学生部学生課に置く
筑紫女学園大学	学習支援室を設置

2. 福岡県内の発達障がいのある大学生の支援課題と対応

- ・ 発達障がいのある（疑われる）大学生への支援の課題と対応
- ・ 資料1：発達障がいと大学生のグレーゾーン
- ・ 資料2：大学生のグレーゾーンの数の推測
- ・ 資料3：就職活動にて顕在化する発達障がい
- ・ 資料4：大学生の子を持つ親の発達障がい受容の問題

発達障がいのある（疑われる）大学生への支援の課題と対応

課題1 大学生にはグレーゾーンが多い（資料1・資料2）

課題2 大学生の就職活動にて発達障がいは顕在化しやすい。また就職ができてでも就労にて顕在化しやすい（資料3）

課題1、2への対応

→「障がい」の文言を避け、ハードルの低い「就活に困る人のためのプログラム（以下プログラム）」を支援の入口とする。

課題3 大学生とその親は「発達障がいがあるかもしれない」という状況を受け入れるのは難しいため、卒業後も含めた長期的支援が必要（資料4）

課題3への対応

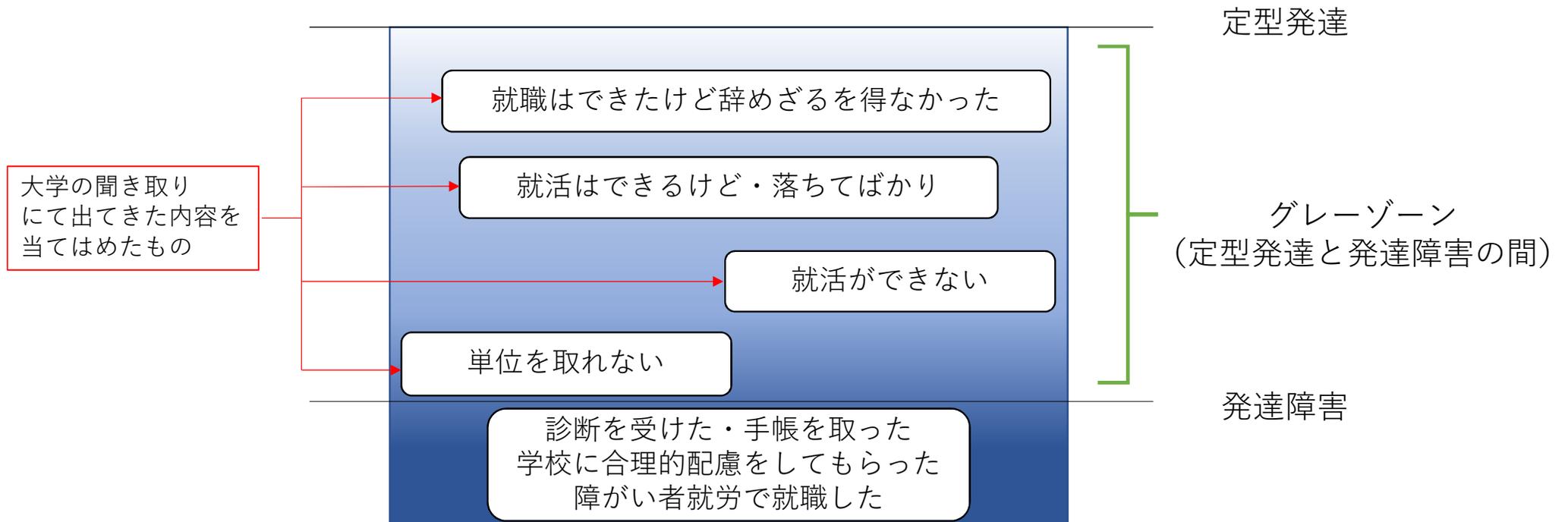
→「プログラム」の利用については、卒業生も含むものとする。また長期的な支援はモデル事業のみでは対応できないため、その受け皿として、有料の医療サービスとしての「青年期デイケア」による長期的・専門的フォローを検討する

課題4 発達障がいの有無に限らず、近年の大学生を取り巻く環境として、奨学金の借り入れ、親の高齢化による経済的な問題がある

課題4への対応→「プログラム」の利用料を無料とする

資料1：発達障がいと大学生のグレイゾーン

グレイゾーンとは定型発達と発達障がいの間にある層のこと



資料2：大学生のグレーゾーンの数の推測

グレーゾーン学生のフォローに注目すべき

独立行政法人日本学生支援機構
(JASSO)による調査



疑いのある人はどれ
だけいるか分からないが、確実に「一定数」いるという大学
関係者の意見がある

発達障害 (診断あり)
4,150人
これは調査した 学生の0.13%
(1300人に1人の割合)

+

成人期の発達障害
ADHD 2.5~4.4%
ASD 1.0%

↓

大学生の中で、グレーゾーン学生
の割合は 全学生の0.87%~
4.27% であり、診断を受けた学生
の約6.2~33.8倍存在すると推
定される

資料3：就職活動にて顕在化する発達障がい



日経カレッジカフェ (<http://college.nikkei.co.jp>) 2017年3月15日

東京大学で発達障害の学生の支援をするコミュニケーション・サポートルーム（CSR）室長の渡辺慶一郎は、「学業の面では支援体制があり、就職後は企業がケアをするが、就活はそうした支援が抜けている『はざま』だ」と指摘する。CSRに来室する東大生の大半が3～4年、もしくは修士2年の学生で「ほとんどが就活を機に症状が顕在化している」（渡辺）。

資料4：大学生の子を持つ親の障がい受容の問題

軽度発達障がいの受容

障害受容過程のモデル（螺旋形モデル・段階的モデル）に違いはあっても親が障害に対する疑いと障害を否定したい気持ちの両極で揺れ動く点は軽度発達障害の受容過程に共通している。

軽度発達障害は、身体の障害や、明らかに遅れが認められる障害と違い、外見上では障害が認められず発達の経過から障害が理解される場合が多い。しかし、一般的には親には発達に関する知識が少ないため、子どもの状態像を客観的に理解し、障害を認めることは容易ではない。軽度発達障害児は独特の困難さを抱えているが、その特徴的な行動は通常の子どもにも認められるものが多いため、軽度発達障害児の親は障害に対して、期待と不安、喜びと失望などの両面的な心理状態を長期にわたり経験し、また否定と肯定の入り混じった勘定の繰り返しを経験せざるを得ない。岩崎久志、海蔵寺陽子（2007）



本人は幼いころから感じた「違和感」の正体が発達障がいであったと知った時は納得しやすいが、大学生の親が「発達障がい」であるかもしれないという事実を受容することは心理的な問題として、時間がかかることが多い

3. 発達障がいの傾向がある大学生向けのプログラムの実施

- ① プログラム第1クールの概要について
- ② 学生向けリーフレット（表）（裏）
- ③ 就活プログラムの実施場所
- ④ プログラム「ここふわ」の開始前における発達障がいのある学生の支援状況（図）
- ⑤ プログラム「ここふわ」の開始後の状況（図）
- ⑥ 【参考】プログラム後の長期的フォローという課題とその対応としての精神科デイケア、ショートケアの利用について
- ⑦ 【参考】プログラムを含めた支援状況と青年期デイケア（仮称）
- ⑧ 【参考】プログラムの受け皿や長期的支援としての青年期デイケア(案)

① プログラム第1クールの概要について

- 第1クールは平成30年2月7日からの毎週水曜日、計8回とした。時間は学生の授業に影響がない時間帯として、午後5時～午後6時30分を設定。時間は一般的な90分とした。
- 学生への受け入れをしやすいように、臨床心理士(40代男性)、アシスタントは精神保健福祉士(30代女性)とした。また場所としては、クリニックのデイケアルームを使用した。
- 愛称があれば良いとの意見を取り入れ、プログラムの愛称を「ここふわ」とした。
- 第1クールの参加者は県内4か所の大学の2年生から4年生、及び中退した学生の計6名。
- 自己理解、他者からの理解などのテーマから始まり、4回目以降はテーマをコミュニケーションに移す。第7回にて面接の練習を実施し、8回目でストレスの学習と振り返りを行った。
- 第1クールはパイロットスタディであり、参加者の状態、進行状況に合わせて変更しながら進めた。
- 自己理解が進み、自己肯定感の上昇などが見られ、就職した者就職活動に向かう。

※プログラムについての詳細は別添資料の「プログラム実施と考察」に記載

COCOFUWA のプログラムですること

臨床心理士を中心としたスタッフが、就職活動に向けてこころの準備を整え、採用面接の場でのコミュニケーションに関する練習の機会を提供します。

- ・ 「熱中したもの」「やめられないこと」「苦手な人」などについて検討し、自分らしさや自分の特徴を知る
- ・ 通知表のコメント、人からよく言われること、心理テストなどをおして、自分が普段あまり自覚していないような自分の特徴を知る
- ・ 自分のあいさつの仕方や声のトーン、しぐさなどを、相手がどう受け取っているのか知り、コミュニケーションのズレについて理解を深める
- ・ ほかの参加者の話を聞くことで、自分だけが悩んでいるわけではないことを知る。あるいは反対に、自分に特徴的な悩みや、苦手なことがらについて理解を深める

あなたと同じような苦手意識をもつ学生同士で、就職活動に向けたこころの準備をしてみませんか？

このようなことがある方は まずご相談ください

次のどれかを感じる大学生（卒業生も含みます）の方が対象です

- ・ 自己分析と言われてもピンとこない
- ・ 集団でのコミュニケーションがうまくいかない
- ・ 空気が読めない
- ・ 集中し過ぎる、または集中できない
- ・ 頑張っているつもりなのに「怠けている」とか言われる
- ・ 電話は苦手 … などなど

相談・申込窓口

- ・ 各大学の学生相談室など

<プログラムの実施機関>

西江こころの臨床研究所

(西江こころのクリニック内)

〒816-0802

春日市春日原北町4丁目11

メディカルシティ春日原3F

電話:070-7656-2444(直通)

092-588-2444(代表)

メール: nishie.cocoro.model@gmail.com



② プログラムのリーフレット(表)

リーフレットの特徴(表)

- ・ 「障がい」の文言等を用いず、苦手な人は誰でも参加しやすい雰囲気とした
- ・ 申込窓口は大学としているので、大学側にて発達障がいの傾向がある学生を紹介してもらうことになる



COCOFUWA は次のことを約束します

費用は無料です

このプログラムを利用するための費用は無料です。ただし、移動のための交通費などは自己負担となります。

個人情報保護します

ご相談に来られた方、その後にプログラムを利用された方の個人情報は保護されます。

大学の担当部署と連携します

大学の学生相談室や就職サポート担当部署と連携します。就職活動を含め、あなたが生きやすくなる方法について、関係者と一緒に見つけていきます。また、個人でのご相談も可能です。

同じ苦手意識をもつ人たちと一緒に就活に向けたプログラムに参加しませんか？

専門的な治療などが必要な方は案内します。ただし、無理に勧めません。

悩みや上手くいかない状況はストレスとなり、これらが続くと「こころ」を疲れさせ、時にはこころや体の病気になることもあります。

病気や障がいの可能性がある場合は診断や治療をご案内します。（無理には勧められるものではありません）

このプログラムの他、時間をかけて取り組むユースデイケアのご案内も致します。

（※ユースデイケアは医療サービスとなり有料ですが、自己負担を減らす補助制度もございます）。



COCOFUWA のプログラムについて

このプログラムは福岡県の大学生向け修学支援モデル事業の一つとして運営されており、福岡県から医療法人西江こころのクリニックが委託され、運営しています。

このプログラムは就活がうまくいかない大学生に向けたプログラムをします。就活がうまくいかない苦手なことがある方、進め方がわからず困っている方は誰でも参加できるようなプログラムにしています。

どなたでもお気軽に参加してください。

Cocofuwa「ココフワ」Facebook ページ



② プログラムのリーフレット（裏）

リーフレットの特徴(裏)

- ・無料であることを示し、学生が参加しやすいものとした
- ・大学と連携するものを明示した
- ・専門的な治療などへの誘導もあることも提示した
- ・フェイスブックを用いて、大学生が利用しやすい雰囲気作りをした

③ プログラムの実施場所（クリニック横デイケアルーム）

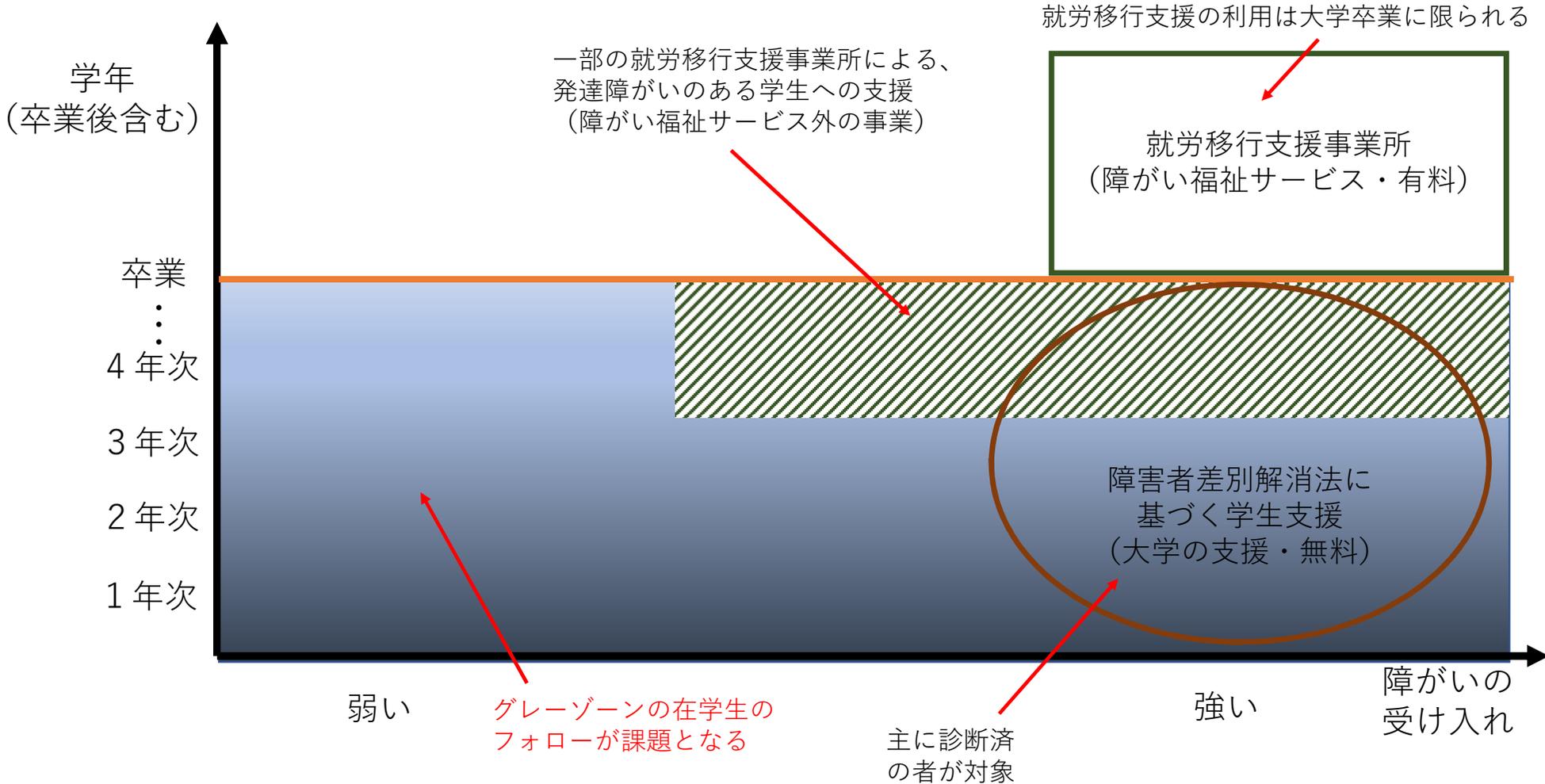


- ・ デイケアルームは同じフロアの当院横にある
- ・ デイケアルームの隣には就労移行支援事業所もある
- ・ デイケアも就労移行支援も活動を終了した時間帯(17:00~18:30)にプログラムを実施している

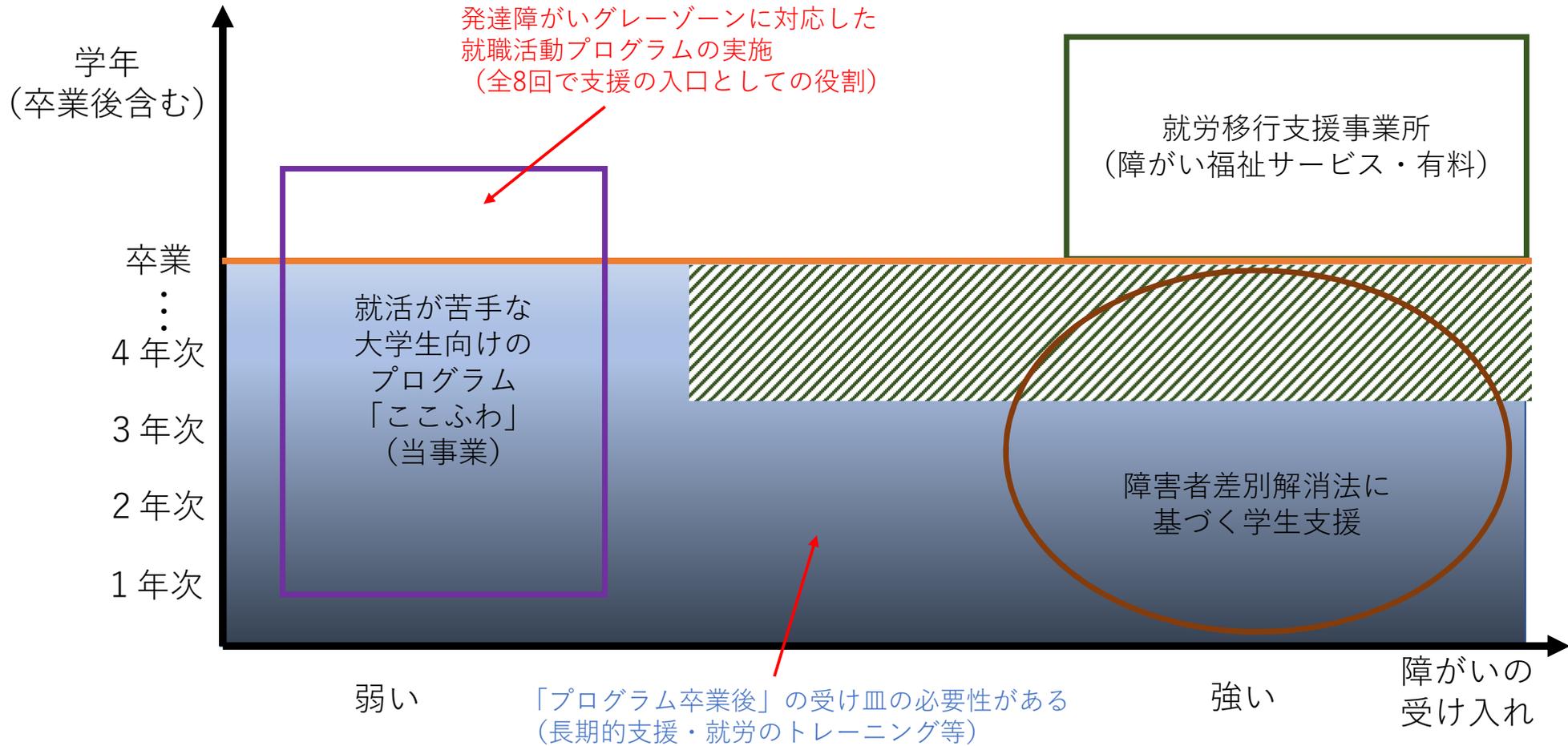


- ・ プログラム開始前の準備段階の状況
- ・ デイケア施設は比較的新しく、木を多用した作りとなっている
- ・ 最初は上の写真にあるような机の配置としたが、後半は利用者が馴染んできたことから、机を四角に組んでいる

④ プログラム「ここふわ」の開始前における発達障がいのある学生の支援状況 (図)



⑤ プログラム「ここふわ」の開始後の状況 (図)



⑥【参考】 プログラム後の長期的フォローという課題とその対応としての精神科デイケア、ショートケアの利用について

プログラムは全8回の構成としており、その理由は次の通りである

- プログラムはその効果を考慮し、1グループを4～5人程度で想定している
- できるだけ多くの学生の受け入れの必要性がある
- 一般的に大学の就職課などの提供することが難しい、「就職活動の前段階」としての位置づけとした
- 限られた予算での人件費などの費用に限りがある



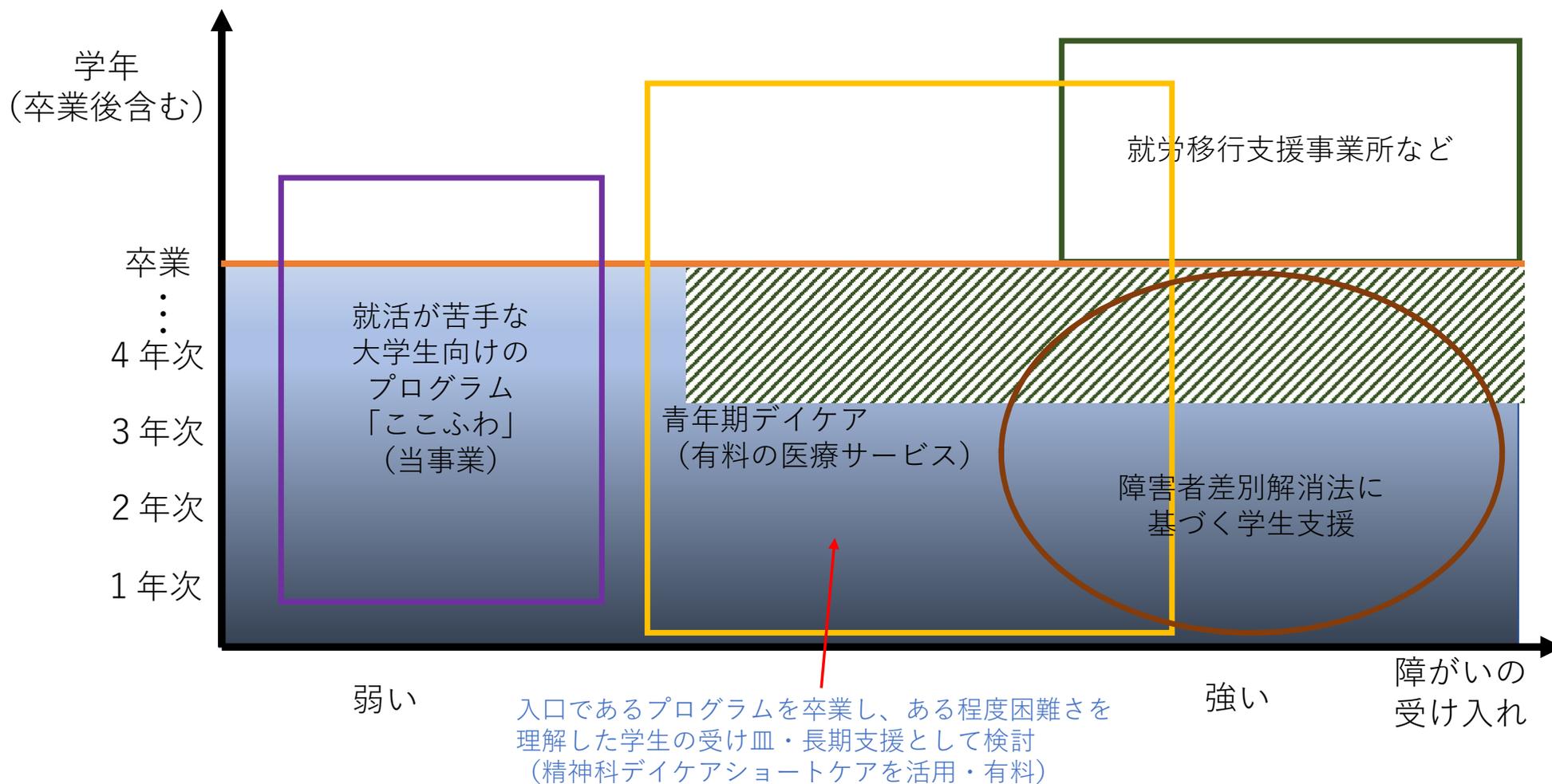
長期的フォローは既存のサービスの中で有料のサービスとせざるを得ない
そのための条件は次の通りである

- 大学生が利用できる制度内のもの(※障がい福祉サービスは該当しない)
- 大学生を取り巻く経済状況を考慮し、安価で続けられるもの
- 専門性などを考慮し、医療機関や福祉機関で提供できるもの



精神科デイケア・ショートケアによるフォローを行うことを検討

⑦【参考】 プログラムを含めた支援状況と青年期デイケア（仮称）



⑧ 【参考】 プログラムの受け皿や長期的支援としての青年期デイケア(案)

- 青年期デイケアは主に20代～30代の発達障がいがある方等で、就職活動が必要な人（一度就職して退職した人を含みます）を対象としています。
- プログラムを利用して、長期的な支援が必要となった方や、クリニックや他の精神科医療機関を利用している方も利用は可能です。尚、他の精神科医療機関で受診中の方については主治医のデイケア処方箋が必要になります。
- 有料の医療サービス（精神科デイケア・ショートケア）による支援となります。精神科の医療費補助制度（自立支援医療）を利用することを前提としていますので、利用料は1回¥0～¥742です。（多くの場合は1回当たり¥400以下か、¥0になります）
- 予定しているのは、筋トレやピラティスなどを取り入れた体づくり、コミュニケーショントレーニング、ストレスコントロール、モデリングによる就活のためのトレーニング、職業評価、模擬店によるトレーニングなどです。
- 就活の準備段階までの支援となりますので、本格的な就活の支援は大学の就職関係の部署や就労移行支援事業所（卒業した人のみ）になります。

4. 平成29年度の当事業における到達点と課題

- ① 平成29年度における当事業の到達点
- ② 平成29年度における当事業の課題
- ③ 課題に対する来年度の対応

① 平成29年度当事業の到達点

- ①大学へのチラシ、パンフレット配布を行い、学生数1000名以上の大学のうち当初の目標としていた18校にマネージャーが赴き説明することができた。
- ②大学への訪問、聞き取りにて、各大学の既存の支援体制について聞き取ることができ、県内の大学で実際に問題となっているグレーゾーンの大学生の支援の必要性が明確になった。また、そのニーズに対してプログラムを実施できた。
- ③また就職活動が発達障がいの顕在化に繋がるということが聞き取りの面でも明確になった。そのため、大学側のニーズに即した支援の形として、プログラムを実施することとなった。
- ④プログラムにおける到達点は次の通りである。
 - 本プログラムによって自己肯定意識が有意に向上したため、採用面接の場等でこれまでよりも肯定的な自己理解に基づく自己アピールが可能になると考えられ、本格的な就職活動の前段階としての本プログラムの役割は果たせたと考えることができた。
 - 参加者の参加意欲が下がることもなく、むしろ回を重ねるごとに満足度が上がっていく形でプログラムを最後まで実施できた。
 - 各参加者の様々な特性ゆえに、クローズドの集団でのプログラム実施にあたっては対人関係やコミュニケーションの面などで懸念があったが、回を重ねるごとにグループの凝集性が高まり、活発な意見のやりとりが見られるようにさえなった。

② 平成29年度の当事業の課題

- ①支援予定人数20名に対して、6名の利用のみとなった。これは事業が9月からの開始だったこともある。またモデル事業の初年度として、大学側へ具体的な実績を示すことができなかったこともある。
- ②また当初は大学側のニーズが予想と違っていたものがあった。聞き取りを終えてニーズの分析を行い、プログラムを開始するまで、大学へ向けたより具体的で効果的な支援方法が提示できていなかった。
- ③当事業の当初の目的は、大学のフォローが難しい、発達障害の診断や治療に向けたフォローを当事業で行い、ある程度の成果を得た後にそれぞれの大学の支援体制に戻していくというプランであった。それは支援対象となる大学生が発達障がいについてある程度受け入れていることが前提にあった。しかし、聞き取りの結果、グレーゾーンの学生の支援が必要であるという課題が表出した。それらグレーゾーンの学生を含めた支援の形として、プログラムを行うという修正を行うこととなった。
- ④発達障がいの診断を得たり、心理テストによる特徴を把握した資料(WAISの結果など)は大学側にとって参考資料の一つにはなるものの、就職活動ができるかどうか、就労能力はどうかということについての資料が欲しいという声も大学側からあった。この点については今年度に対応策は取れていない。
- ⑤プログラムにおける課題は次の通りである。
 - ・ 各プログラムの内容を修正し、自己理解を促進するという目的に適ったものにしていく必要がある。
 - ・ プログラム実施の順番などについても検討していく必要がある。
 - ・ さらに幅広い測定尺度を用いて、実証的にプログラムの効果を検討していく必要がある。

③ 課題に対する来年度の対応

- ①プログラムの第1クールの実施により、各大学に対して、ニーズに即した具体的な支援方法を提示できるようになった。そのため、来年度の第2クール以降は年間20名以上の支援予定数は確保できるものと予想される
- ②プログラムを開始することで、来年度は大学へ向けたより具体的、効果的な支援方法が提示できる。
- ③プログラムの継続実施により、グレーゾーンを含めた学生へのサポートが、平成29年度以上に可能となる。
- ④職業評価(障害者職業センターが開発したもの)、模擬店などを実施して観察することにより、適職についてのアセスメントが可能になると思われる。
- ⑤プログラムにおける、来年度に向けた対応は次の通りである。
 - ・今年度は、自己理解を深めることを目的として様々なプログラムを行ったが、その結果として、どのような自己理解に至ったのかを総括的に確認するような取り組みは行わなかった。そのため来年度は、自分の長所や短所、特徴などについて、どのように自分を理解するようになったのかを確認するプログラムを計8回のプログラムの後半に組み込みたい。
 - ・「自己閉鎖性・人間不信」の下位尺度に変化が見られなかったため、今後はこの側面に対応するようなプログラムを導入したい。
 - ・計8回のプログラムの前半は、自分の意見や自己分析などの結果を他の参加者が見ることへの抵抗が語られることも多かったが、後半になり、グループの凝集性が高まってくるにつれて、「人の意見が聞けてよかった」「いろいろな考え方があると知れてよかった」などといった声が多く聞かれるようになった。そのため、来年度はプログラム実施の順番についても検討したい。
 - ・各参加者の特性や自己評価、自己概念をさらに詳細に理解するべく、様々な測定尺度を活用したい。

5. 【参考】平成30年度の事業計画(案)

平成30年度の事業計画(案)

① 事業の目的

・大学において現存の学内の支援ではフォローの難しい、発達障がいがある、または疑われる、またはグレーゾーンの大学生が修学及び就職活動を円滑に行えるよう、大学側と連携しながら支援を行う。また、医療や福祉の機関の支援が必要な場合には、それら機関に繋がるよう支援を行う。

② 支援の方法

・「就職活動が苦手な大学生向けのプログラム(以下プログラム)」による支援を行う。このプログラムは発達障がいの傾向がある大学生グレーゾーンの大学生も対象とし、それらの学生が参加しやすいよう、パンフレット等への配慮を行う。

・プログラムによる支援は、参加した大学生の自己理解が進むことにより自己肯定意識が向上するなどし、就職活動に前向きに取り組むようになっていたり、必要であれば医療や福祉の支援を受けることを意識できるようにする。

・尚、プログラム実施者の見立てにより、発達障がいの診断や治療、その他の医療面での支援が必要と判断された学生には、診断や治療を行うことを勧めることもある。

③ 事業の周知・広報活動

・県内の大学へ当事業の周知を文書や訪問にて行う。その際、大学側に当事業の理解が得られやすいように、実施したプログラムの成果を用いて説明を行う。また訪問の際には、個々の大学のニーズを把握し、以後の支援方法の改善に役立てる。

④ 大学との連携

・平成29年度に実施したプログラム第1クールの結果を基に、支援方法やその流れをより具体的に記し、大学が学生を案内しやすいパンフレットへの改訂作業を行う。

・プログラムに参加した学生についての情報共有、連絡をマネージャーが大学側と適宜行い、相互の支援が適切に行われるように配慮する。

